



Title	野菜選果施設における雇用労働者の性格差に関する比較分析
Author(s)	泉谷, 眞実; IZUMIYA, Masami
Citation	北海道大学農経論叢, 50, 237-252
Issue Date	1994-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/11102
Type	departmental bulletin paper
File Information	50_p237-252.pdf



野菜選果施設における 雇用労働者の性格差に関する比較分析

泉 谷 眞 実

An Analysis of the Labor Force at Two Quality Inspection Facilities

Masami Izumiya

Summary

The work force in two vegetable quality inspection facilities in Hokkaido; one is in Nayoro, and the other is in Memuro, has some notable differences. For example, workers in Nayoro are fairly young, whereas those in Memuro are older. We have found that these differences are possibly caused by the different management policy of individual agricultural cooperatives towards the local agricultural industry.

1. 課題と方法

近年、施設園芸や畜産部門を中心とした農家における雇用労働力の増加が見られ、「雇用型家族経営」「雇用型農業経営」（今井〔2〕, 秋山〔1〕）の形成として注目されている。他方、野菜作における農家労働力の脆弱化が進行する中で、野菜作労働時間の大きな部分を占める選果・調製労働の軽減をはかるために、農家から農協等の選果施設への選果・調製機能の分化が進展している。そして、選果・調製作業は手作業に依存する部分が多いために、産地の選果・包装施設における雇用労働力の重要性が高まっている（泉谷〔5〕）。このような動きの中で、農協の集出荷施設における労働力不足が、農家における労働力不足とともに、地域農業において大きな問題となっている（流通システム研究センター〔9〕）。

これら農家や産地の選果・調製施設における雇用労働者は、主婦労働力を中心とした地域の労働市場に深く組み込まれた階層を主たる供給源としている。このことは労働市場を媒介とした農業セクターと非農業セクターとの関係が、農業雇用労働力をめぐってより密接になっていることを意味している。こうした状況から、農業雇用労働者の性格を、地域経済とそれに対する農家・農協の対応との関係で明らかにすることが、一つの重要な課題となってくる。

以上をふまえて本論文では、地域の野菜選果・包装施設における雇用労働者の地域間の性格差が発生する要因を、地域経済の変化に対する農協の対応の側面から明らかにすることを課題とする。分析は、農協の集出荷施設における労働力不足が著しい北海道（前掲〔9〕）の二つの野菜産地を対象としたケーススタディによって行う。二つの野菜産地とは、野菜選果・包装施設における雇用労働者の属性が対照的な道北の名寄市と道東の芽室町である。そして、名寄市では道北青果広域農協連合会（以下、道北青果連と省略）の、芽室町では芽室町農協の、各選果・包装施設における聞き取り調査と就業者に対して実施したアンケート調査結果をもとに検討を行う（註1）。

対象とした名寄市と芽室町は専門的な農家が大量に存在し、名寄市は畑作地帯とモチ米を中心とした水田地帯からなる田畑作地帯であり、芽室町は畑作四品を主体とした大規模畑作地帯である。農業粗生産額では両地域とも耕種が中心であるが、ともに野菜・花卉の占める割合が上昇している。名寄市では、市内の名寄農協と智恵文農協、および近隣の風連町農協、下川町農協の四農協で構成する道北青果連を中心とした野菜産地化が進み、グリーンアスパラとカボチャを中心とした野菜産地を形成している（岩崎他〔4〕）。芽室町では一戸当たり経営面積が23~24haと大きいため、野菜の中でも作業の機械化が進んでいる根菜類の導入が進んでおり、農協の奨励品目は長芋、ゴボウ、大根の三品目である。このような野菜作の増加の中で、道北青果連では約200名、芽室町農協では約100名を各野菜選果施設では雇用しており、これらの就業者は地域農業の発展において重要な機能を果たしている。

また、地域においては農家における雇用も行われているが、名寄市ではアスパラの収穫期に短期的かつ大量の雇用が導入されているのに対し、芽室町では畑作と野菜において春から秋にかけて一定の雇用が行われている（長南〔8〕）。

以下、第2節では両地域の就業構造の特徴を示し、第3節では対象とした選果・包装施設の雇用実態を示す。そして、第4節では両施設の就業者に対して実施したアンケート調査をもとに、就業者の経済的な性格を明らかにし、第5節で要約と考察を行う。

2. 対象地域における就業構造の特徴

ここでは、名寄市と芽室町の就業構造の特徴を検討する。まず、人口の変化では、両地域ともに1980年から90年にかけて減少を示しているが、名寄市近郊が全体として人口減少地帯であるのに対して、芽室町は道東最大の都市である帯広市の通勤圏となっているという違いがある。

男子の就業構造(表1)であるが、名寄市では雇用者の32.0%が公務員で

表1 産業別の雇用者数(1980-90年)

	名 寄 市				芽 室 町			
	男子 1980	90	女子 80	90	男子 1980	90	女子 80	90
総数	9,110	8,203	3,858	4,253	3,262	3,289	1,910	2,079
農林漁業	174	128	119	114	108	100	129	172
建設業	1,281	1,106	276	217	667	577	141	104
製造業	881	750	532	530	604	623	395	377
卸小売業	1,165	1,081	1,226	1,269	367	464	454	510
金融保険不動産業	179	164	217	222	51	51	38	58
運輸通信業	1,499	785	113	105	327	343	58	60
サービス業	1,315	1,359	1,261	1,631	835	844	635	736
公務	2,447	2,628	96	147	263	248	56	51

(資料) 国勢調査。

最も多くなっており、次いでサービス業が16.6%、卸小売業が13.2%、建設業が13.5%となっている(1990年)。これら公務員は自衛隊職員を中心としており、20-44歳までは年齢階層別の就業者の中でそれぞれ占める割合が最も多くなっている(表2)。このように名寄市では公務員に依存する割合が高いという特徴がある。これに対して芽室町では、就業者の30.5%が農林漁業であり、次いでサービス業18.7%、建設業12.8%、製造業12.8%、卸小売11.6%となっている。

表2 名寄市における男子年齢階層別の就業者数構成比 (1990年) (単位：%)

	総数	農業	建設業	製造業	運輸通信	卸小売	サービス	公務
総数	9,548	6.4	12.8	8.2	8.4	14.7	16.7	27.5
15-19	284	0.7	3.2	8.1	2.5	18.7	4.2	59.9
20-24	1,041	1.8	5.7	2.5	3.7	11.8	8.3	64.4
25-29	1,024	3.0	8.2	4.3	7.4	13.2	15.7	43.9
30-34	947	3.3	9.5	4.6	9.1	15.4	18.2	35.2
35-39	1,046	5.2	11.0	7.5	11.7	15.6	16.6	27.3
40-44	1,279	4.6	11.1	10.4	11.4	16.8	14.6	25.6
45-49	956	3.3	11.8	13.0	14.9	15.6	17.5	17.4
50-54	943	5.1	17.4	13.3	10.7	14.8	19.6	11.5
55-59	918	8.1	21.2	11.1	7.0	14.1	23.6	6.2
60-64	545	16.0	29.7	8.4	2.9	11.9	21.1	5.5
65-	565	30.1	15.9	6.5	1.4	15.9	21.1	5.5

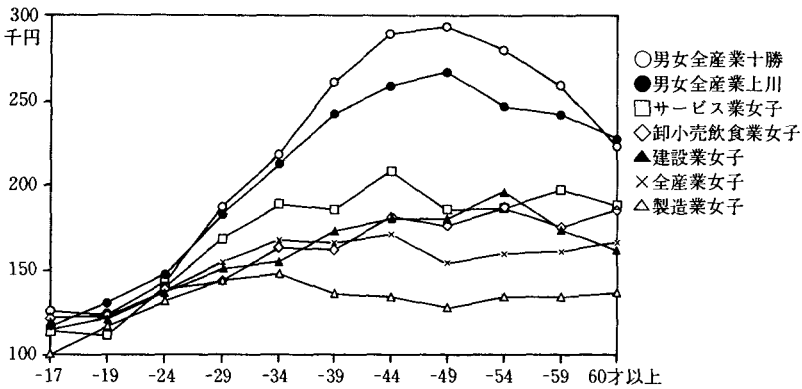
(資料) 1990年国勢調査。

次に女子の就業構造をみると、名寄市ではサービス業が33.7%と最も多く、次いで卸小売業が30.2%、農林漁業12.2%、製造業10.1%となっている。これに対して芽室町では、農林漁業が40.4%と最も高く、次いでサービス業22.8%、卸小売業17.9%、製造業10.4%となっている。特に芽室町には、製造業の中でも食品加工業が多く、9～10月の農産物取扱の時期に女子を中心とした作業員を必要とする業種が多いのが特徴である。

また、季節労働者の状態をみると(北海道商工労働刊行部職業対策課『季節労働者の推移と現況(平成3年度)』)、絶対量そのものは減少しているが、帯広市近郊では16,804人(うち男性が64.7%)が存在し、90年の雇用者総数の13.3%を占めている。また、名寄市近郊でも同様に、6,234人(うち男性が73.4%)が存在し、雇用者の20.4%を占めている。これらの就業者は建設業を中心に地域に存在している(帯広市近郊で58.4%、名寄市近郊が63.7%)。

図1には、名寄市を含む上川地域と芽室町を含む十勝地域におけるそれぞれの年齢階層別の1カ月当たりの所得を示したが、29歳を境に十勝地域が上川地域よりも賃金が上回っており、この点は後述する農業雇用における賃金の地域間格差の背景となっている。

図1 年齢階層別の1カ月の所定内給与額



(資料) 北海道商工労働観光部【中小企業賃金実態調査—平成3年7月31日現在—】。

3. 野菜選果・包装施設における雇用の実態

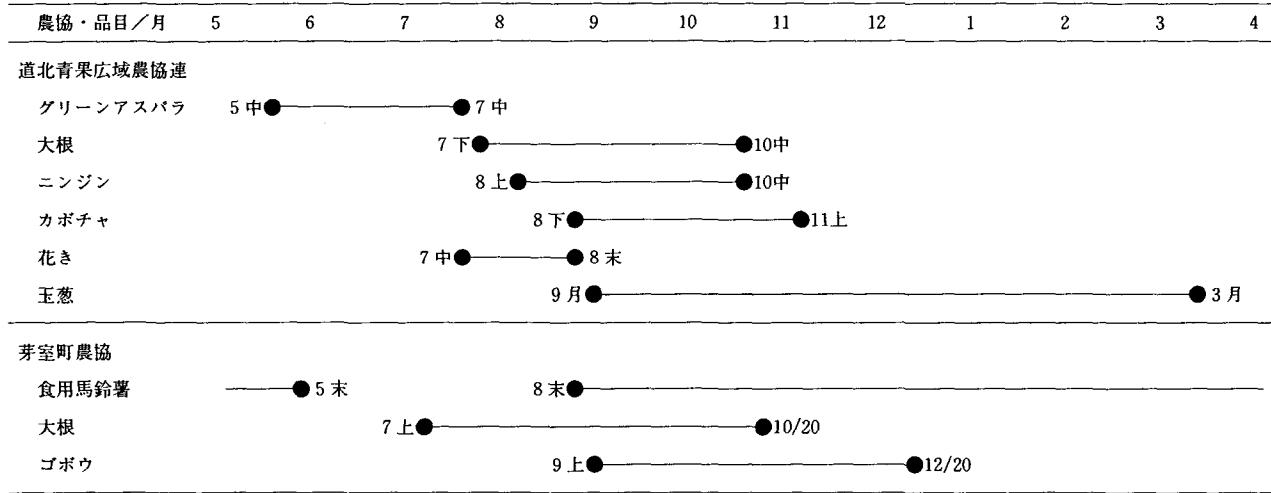
ここでは、二つの対象農協の野菜選果・包装施設における雇用の実態を、両農協における聞き取り調査から検討する。

1) 道北青果連の野菜選果・包装施設における雇用の実態

道北青果連では、グリーンアスパラを中心とした六品目の共同選果業務を行っている。共選品目と作業期間を表3に示したが、5月から7月までのアスパラ選果作業で女性約180名が契約を行い、作業に従事する。そして、その作業が終了した後、この中の140名がその他の品目で10月または11月まで就業を行う。さらに、その内の30名がタマネギの選果作業で3月までの就業を行う。タマネギの選果作業員30名はタマネギの選果作業を専門に行うが、残りの人員はその他の四品目で毎日の出荷量にあわせて配置されている。

作業員の性別・年齢階層別の人数と構成比を就業者名簿からみると、総数では183名が登録しており、このうちの97.8%を女子が占めている。これらの就業者は農協の労務管理の上で、アスパラの選果・包装作業の終了後も比較的長期にわたって就業を行う「全期間」と、アスパラの選果・包装作業時からその後は比較的短期間しか就業を行わない「最盛期」とに分けられており、就業者の年齢構成が大きく異なっている。総数では、男性が2.2%、女

表3 選果・包装作業における農協別・品目別作業期業（1991～92年）



(資料) 各農協における聞き取り調査。

註1) 黒丸の添え字は、数値は月を、「上」「中」「下」は各旬を、「末」は末日を示す。

子の39歳以下32.2%，40～49歳46.9%，50歳以上18.6%と50歳未満の就業者が中心となっている。しかし、「全期間」では男性が5.9%，40～44歳が27.9%，45～49歳が25.0%，50歳以上が29.5%であり，40歳以上が82.4%なのに対して，「最盛期」は34歳未満が13.9%，35～39歳が30.4%，40～44歳が33.0%，45～49歳が10.4%であり，45歳未満が77.3%を占めている。このように40～44歳で両区分ともに就業者数のピークを形成しつつも，「全期間」では40歳以上が，「最盛期」では45歳未満が就業者の主体となっている。このような就業者の年齢階層の違いは，主として後述する勤務時間帯の差にその要因がある。なお，就業者は，非農家世帯の主婦労働者が中心である。

アスパラの選果作業は，選果場と包装施設における作業とに分けられる。選果場では，出荷の最盛期には60名が，少ないときには48名が就業を行っている。就業者は，名寄市内に居住している人が多いが，隣接する風連町から13名が通っており，これら風連町からの就業者にのみバス送迎を行っている。また，この送迎の関係上，風連町からの就業者は選果場に集められており，包装施設は名寄市居住者のみで行われている。募集は新聞広告と口コミが中心であり，募集に際しての年齢制限は行っていない。選果作業就業者の平均勤続年数は5年程度，平均年齢は約43歳である。

包装施設では，女性が常時75名が就業を行っており，92年からは就業時間帯を三つ設定している。開始時間は8時30分であるが，終了時間は12時（A），午後3時（B），午後5時（C）である。この時間帯の設定以前にも，就業者は都合の良い時間に帰っていたという問題があったために，三つの時間帯を設定している。それぞれ（A）30名，（B）30名，（C）60名が交替で就業を行っている。就業者の平均年齢はこの時間帯ごとに異なっており，（A）は20歳代の若い主婦労働者，（B）では20～30歳代前半の主婦労働者，（C）では30歳代半ばから65歳までの主婦労働者となっている。先に見た「最盛期」を主体とした39歳以下の相対的に若い就業者は，これら時間パート形態による農協の対応によって確保されている。

就業条件を表4に示したが，賃金は全て時給制であり，アスパラの選果・包装作業が最も低く，大根は洗浄作業で水を扱うために，タマネギは冬場の仕事のために最も高く設定されている。また，これらの金額には年齢による格差はつけられていない。雇用保険はタマネギの選果作業で翌年の3月まで

表4 選果・包装作業における農協別・品目別の就業条件 (1992年)

農協・品目	就業時間	1日の 労働時間	時給 (円)	手当等 (1時間当り)	休日	その他
道北青果連						
グリーンアスパラ	8:30-17:00	7時間				<ul style="list-style-type: none"> • 140人には秋に3千円支給 • 慰労会を年1回 • 11月に全員で会食 • 保育所の設置 • 風連町の13人をバス送迎
	8:30-12:00	3時間15分	540	日祭日100円	設定なし	
	8:30-15:00	5時間15分				
大根	8:30-17:00	7時間	600	なし		
ニンジン	8:30-17:00	7時間	570	なし	設定なし	
カボチャ	8:30-17:00	7時間	570	なし	設定なし	
玉葱	8:30-17:00 [*]	7時間				
	9:00-16:00 ^{**}	5時間30分	650	なし	設定なし	
芽室町農協						
食用馬鈴薯	8:00-17:00	7時間30分	590	精勤40円, 経験20円	週1日	• 帯広市の人はバス送迎
大根	8:00-17:00	7時間30分	700	精勤40円	週1日	• 通勤費支給
	18:00-21:00	3時間	1,000	
ゴボウ	8:00-17:00	7時間30分	640	精勤40円, 経験20円	日祭祝日	

(資料) 各農協における聞き取り調査。

註1) 道北青果連の玉葱で、「*」は夏期を、「**」は冬期を示す。

の就業を行う30人にのみ91年から適用されている。

2) 芽室町農協の野菜選果施設における雇用の実態

芽室町農協で共選作業を行っている品目は、食用馬鈴薯、ゴボウ、大根の三品目である。奨励品目の一つである長芋は、帯広川西農協と共同で出荷しており、選果作業は川西農協の選果施設で行っている。ゴボウは、帯広川西農協、中札内村農協と共同で出荷しているため、この二農協の長芋の選果作業も芽室町農協で行っている。

各品目の作業期間は前掲表3で示したとおりだが、9月から10月にかけて全ての作業が競合する時期があるため、食用馬鈴薯では女性32名（1日の稼働人数は28名）、大根では女性35名（同27名）、ゴボウでは女性28名がそれぞれ独自に雇用がなされている。ただし雇用保険の関係から、翌年の春までの雇用を希望する数名の就業者は大根の選果作業が終了するまえに、最も作業期間の長い馬鈴薯の作業に移ることがある。

就業者の平均年齢は品目によって異なっており、食用馬鈴薯では50歳代が、ゴボウでは55～60歳（馬鈴薯選果作業員のOBが多いが、これは馬鈴薯の選果作業は手を早く動かすので高齢になるとできないためである。）、大根では40歳代が中心である。全体としては50歳以上の女性が就業者の中心となっている。また、馬鈴薯・ゴボウの選果作業は埃が発生して作業環境が悪いが、大根の作業は洗浄作業のため埃が発生せず、作業環境が他よりも比較的良好いため、相対的に年齢が低くなっている。

就業者の居住地は、芽室町内が6割、帯広市が4割であり、人口の集中した帯広市に依存する割合が高くなっている。また、帯広市からの就業者には、送迎を行っている。選果作業が農作業と時期的に重なるために就業者に占める農家世帯員の比率は低く、非農家世帯の主婦が中心となっている。

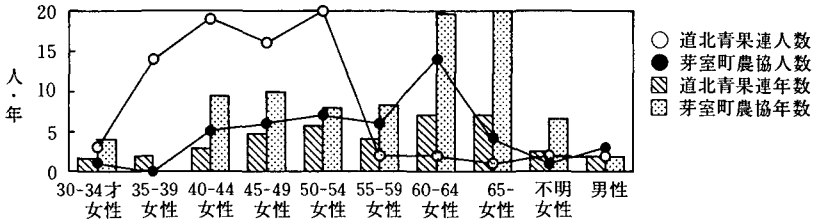
就業条件を前掲表4に示したが、賃金は町内の他産業との比較で決定されており、短期の雇用では他産業も賃金を普段よりも高くするため、就業期間の短いゴボウと大根の選果作業は、馬鈴薯を基準として1時間当たり50円高く設定されている。また、大根の選果場は遠距離にあるため、大根の選果作業ではさらに1時間当たり移動賃として20円高く設定されている。賃金の他に、精動手当て（1カ月に20日以上出勤者が対象）、経験手当（2年以上

の勤続者が対象)が設定されている。雇用保険は作業期間の関係上、馬鈴薯の選果作業員にのみ適用されている。三品目ともに、作業時間は午前8時から午後5時までであり、労働時間は7.5時間である。

4. 就業者の性格

ここでは、道北青果連および芽室町農協の野菜選果・包装施設の就業者に対して実施したアンケート調査をもとに、農業雇用労働者の性格について検討を行う。図2には性別・年齢階層別の回答者数と平均勤続年数を示した。

図2 年齢階層・性別の回答者数と勤続年数

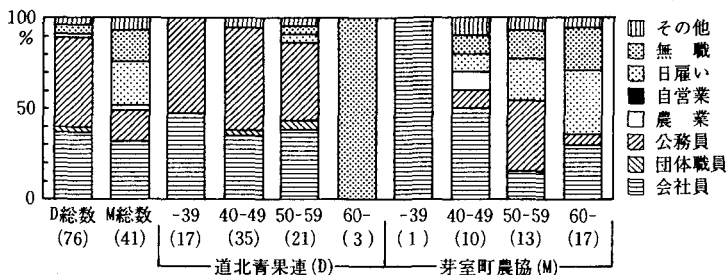


(資料) アンケート調査。

回答者は女子が大半を占めているが、道北青果連は55歳以下が、芽室町農協では50歳以上が相対的に多くなっており、これは母集団の性格を反映しているといえる。ただし、道北青果連の35歳以下の階層、すなわち時間パートの就業形態をとる就業者はほとんど回答していない。勤続年数は、道北青果連が総数及び女子計ともに3.9年なのに対して、芽室町農協では総数で12.2年、女子計で12.9年となっており、芽室町農協が相対的に勤続年数が長くなっている。

まず、就業者の属性を確定しておこう。続柄は、「妻」が道北青果連で93.8%、芽室町農協で77.1%と最も多くなっており、就業者は主婦労働力を中心としていることがいえる。これら主婦労働力の社会的な階層を見るために、「家の主たる所得者の職業」を女子の年齢階層別に示したもみたものが図3である。総数では道北青果連が「会社員」「公務員」等の比較的就業の安定した職業が多数を占めているのに対し、芽室町農協では「日雇い」「無

図3 年齢階層別女子の「主たる所得者の職業」



(資料) 図2と同じ。

註1) カッコ内の数値はサンプル数を示す。

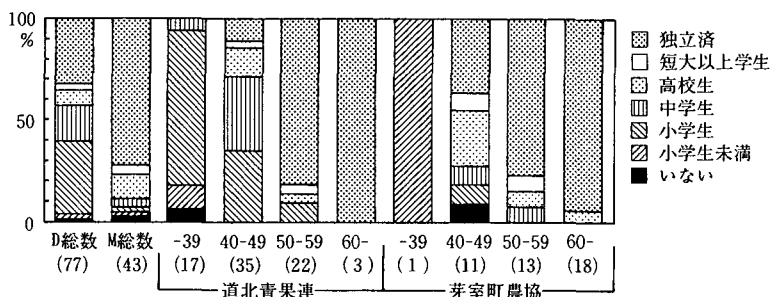
職」等の不安定な就業を行っている人が半数以上を占めている。これを年齢階層別にみると、道北青果連では全階層で「会社員」「公務員」が大半を占めているのに対して、芽室町農協では40-49歳の階層においても「日雇い」「無職」が4割から5割を占めている。このように芽室町農協では相対的に不安定な就業を行っている世帯から労働力が供給されているのである。

次に、図には示さなかったが、就業者の「農作業経験」をみると、道北青果連では農作業経験のない就業者が42.0%を占めているのに対して、芽室町農協では15.6%であり、芽室町農協の方がなんらかの形で農作業の経験がある人が多くなっている。

以上のように、両農協とも主婦労働力を主要な労働力の供給源としているという共通性はあるが、道北青果連では30~40歳代の農作業の経験が少なく、社会階層としては比較的収入の安定した世帯の労働者を中心に雇用しているのに対して、芽室町農協では50歳以上の農作業経験のある高齢主婦労働力を中心とし、社会階層としては相対的に不安定な階層が多くなっているという違いがある。

主婦の就業構造に大きな影響を与える末子の状況を図4からみると、道北青果連では就業者の年齢階層が若いことを反映して、総数では初等・中等教育を受けている子供を持つ親が半数を占めているが、50-59歳の階層からは「独立」したという就業者が多い。これに対して芽室町農協では、総数で「独立」した就業者が7割を占めている。これを年齢階層別にみると、両地域と

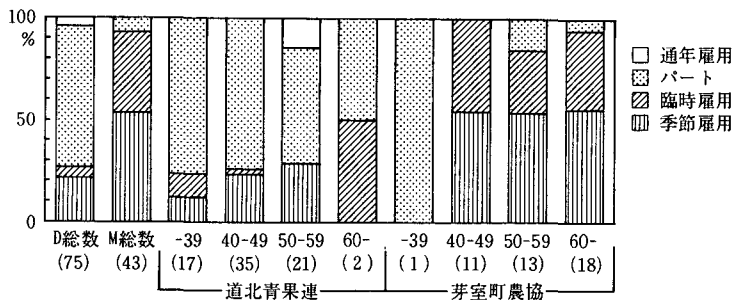
図4 女子の年齢階層別末子の学年



(資料) 註1) 図3と同じ。

もに年齢の上昇とともに初等・中等教育をうけている子供の比率は低下するが、芽室町農協では40-49歳の階層で中学生以下の子供がいる比率が低くなっているという違いがある。このように、道北青果連では子供の年齢が低いために、その就業に制約がある就業者が中心なのに対して、芽室町農協では子供の世話などによる就業の制約がない人が多くなっている。雇用形態を図5からみると、総数では道北青果連がパート形態を主体としているのに対して、芽室町農協では、季節雇用と臨時雇用形態が主要な形態となっている。また、年齢階層別では道北青果連が年齢の上昇とともに季節雇の比率が上昇

図5 女子の年齢階層別雇用形態

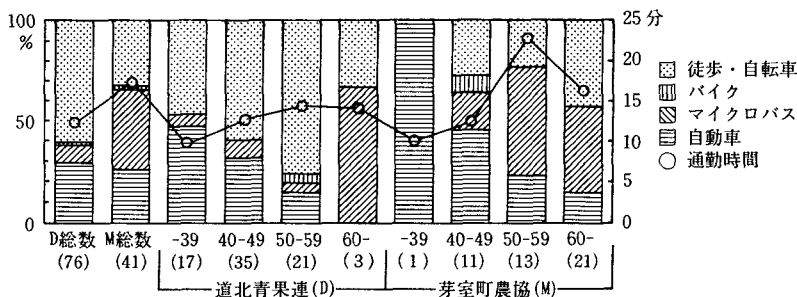


(資料) 註1) 図3と同じ。

しているが、芽室町農協では季節雇の比率に年齢毎の大きな変化はないのが特徴である。

女子の通勤方法と通勤時間を図6から見ると、総数では道北青果連が「徒歩・自転車」が最も多くなっているのに対して、芽室町農協では「乗用車」、「マイクロバス」、「徒歩・自転車」が同じ程度になっている。また、通勤時間は芽室町農協の方が高くなっている。年齢階層別では、両地域ともに乗用車で通う人は若年層で多く、年齢の上昇とともにその比率は低下している。

図6 年齢階層別女子の通勤方法と通勤時間（複数回答）



(資料) 註1) 図3と同じ。

また、地域別では道北青果連が年齢の上昇とともに徒歩・自転車の比率が増加しているのに対して、芽室町農協ではマイクロバスの割合が高くなっている。また、各農協の通勤方法別の通勤時間をみると、道北青果連では乗用車が9.5分、マイクロバスが11.0分、徒歩・自転車が14.0分、芽室町農協では乗用車が11.7分、マイクロバスが21.4分、徒歩・自転車が15.0分である。このことは、道北青果連では徒歩・自転車で15分程度の時間で通える範囲の就業者から労働力の供給がなされているのに対して、芽室町農協では総体として若年層では乗用車で10分、中高年層ではマイクロバスで20分という遠距離の就業者に依存していることを意味している。

「選果場」以外の農業関連の仕事で従事した人は、道北青果連では「加工場」0人、「圃場」が7人(8.6%)であり、ほとんどの就業者が選果施設のみで就業を行っている。これに対して芽室町農協では、「加工場」21人(43.8%)、「圃場」20人(41.7%)が選果場以外の農業関連に従事している。

このことは、約半数の就業者が選果施設と加工施設、圃場作業を組み合わせで就業を行っていることを意味している。これは、道北青果連の立地する名寄市での農家の雇用はアスパラ収穫の5～7月に集中しているのに対して、芽室町を含む十勝畑作地帯では除草作業を中心として、4～10月にかけて農家の雇用が必要になっているためである（註2）。このことは、農家作業と選果作業を続けることで就業期間の長期化が可能になっていることを示している。

農業関連以外の仕事の従事に対しては、道北青果連では「ある」が23人（28.4%）、「ない」が54人（66.7%）なのに対して、芽室町農協では「ある」が9人（19.6%）、「ない」が37人（80.4%）であり、道北青果連の方が他の仕事に従事した人が若干多くなっている。

就業者の賃金水準、年間就業日数および年間所得を表5に示したが、賃金の決定方式は就業する品目によって決められているため、年齢による賃金格差は認められない。道北青果連と芽室町農協を比較すると、芽室町農協の方が全年齢階層・男女共に道北青果連よりも高くなっている。この格差は、前掲図1に示した上川と十勝の賃金格差と対応した形になっている。また、就業日数も芽室町農協の方が長く、その結果、年間所得も道北青果連が年間20～40万円なのに対して、芽室町農協では50～100万円となっている。ただし、芽室町農協の場合には、農家の圃場作業での所得も加えられた結果と考えられる。

表5 年齢階層・農協別の所得水準

		女					性				男性
		30 -34	-39	-44	-49	-54	-59	-64	65歳 以上	小計	
時給 (円)	道北青果連	558	553	553	554	547	540	555	595	552	929
	芽室町農協	640	-	665	602	656	659	650	700	652	1,000
年間就業 日数(日)	道北青果連	95	64	96	108	105	75	100	66	93	155
	芽室町農協	-	-	223	143	184	123	171	165	164	205
年間所得 (千円)	道北青果連	376	246	218	393	441	397	290	428	348	1,365
	芽室町農協	-	-	1,163	670	967	637	871	556	818	1,640

(資料) 図3と同じ。

註1) 年間就業日数および年間所得は、農業関連就業によるもののみである。

2) 数値は1991年度の実績。

5. 要約と結論

これまでの分析を対象地域に即して要約すると以下のとおりである。

まず、名寄市では、自衛隊を主体として安定的な就業を行っている、若年および中年の公務員世帯が大量に存在する。これらの世帯では妻の所得に対する家計補充の要請が、世帯主が不安定な就業を行っている世帯よりも低い。そのため、家計補充のための労働力化の要請が相対的に低い30～40歳の主婦労働力が存在することになる。他方でこれらの労働者は低年齢の子供を抱えており、その養育のために現在の社会環境のもとでは短時間労働にしか就くことができない。これに対して道北青果連の選果・包装施設では、アスパラの収穫期に規定された短期的なアスパラ選果作業員に対する需要が存在する。このような地域の主婦労働力をめぐる需要と供給を背景にして、道北青果連はパート形態の導入と自由な休日の取得を基本に、比較的若い主婦労働力を確保しているのである。しかし、雇用期間が短く、かつ賃金水準が低いため年間の所得が低くなるため、世帯主が季節雇・臨時雇・無職等の不安定就業の状態にある世帯からの主婦労働力の吸引を行うことができない。

他方、芽室町農協では、北海道に特有の季節労働者世帯の存在を基礎とし、家事・育児等の負担が少なく、労働力供給に制約の少ない高齢主婦、および子供が低年齢の場合でも妻の収入に対する家計補充圧力が強い、季節労働者世帯の中年主婦の存在を、就業者確保の背景としている。農協は、これらの広い範囲に点在する労働者を、マイクロバスによる送迎という手段によって確保している。また、地域の農家における雇用労働力の需要は、選果場との就業を連続化することによって、就業者にとっての就業期間を長くする機能をはたし、就業者世帯の家計補充圧力に対応した収入の確保を一年を通して可能にしているのである。

以上で検討してきたように、農業雇用労働者の性格は、第一義的には主婦労働力の供給構造の特質に規定されており、その具体的な供給形態は地域労働市場の構造に依存している。しかし、農業雇用労働者の性格は労働市場によって一方的に規定されているわけではなく、地域農業の特質に基づいた農協の対応によって大きく影響をうけているのである。

〔註〕

- (註1) 調査は、1992年の夏に実施した。また、アンケート調査は、調査農協の協力を得て就業者名簿をもとに、1993年の冬に全員に郵送で実施した。発送数、回答者数、回収率はそれぞれ、道北青果連が185人、75人、41%、芽室町農協が102人、45人、44%であった。なお、アンケート調査票は、今井・泉谷〔3〕で使用したものを参考にした。
- (註2) 芽室町における月別の農作業求人数を、1987年の芽室町援農協会の資料からみると、6月にピークを形成し、8月には求人が低下し、その後10月にかけて求人が増加する動きを示している(長南〔8])。また、農家雇用労働者の性格を芽室町援農協会の加盟員からみると、平均年齢62.8歳の女子が中心であり、家の所得は200万円未満が三分の二を占めている。また、援農労働日数は60～79日が40.7%を占めており、秋以降は62.0%が援農を行わず、その他の75.0%は農協の集出荷施設で就業している(金岡〔6])。

〔引用文献〕

- 〔1〕秋山邦裕『雇用型農業経営』(財)農政調査委員会、1991年3月
- 〔2〕今井健『農業労働者の性格と地域における需給構造』『農業経済研究』、第62巻第4号(1991年3月)
- 〔3〕今井健・泉谷眞実『園芸野菜地域における農業雇用』北海道農業試験場農業組織研究室・北海道大学農業市場論研究室・北海道農業協同組合中央会、1991年6月
- 〔4〕岩崎徹・泉谷眞実・金岡正樹・志賀永一『北海道における農業雇用労働力の需給構造』北海道地域農業研究所、1993年3月
- 〔5〕泉谷眞実『農協流通施設における雇用労働』『北海道農業』第15号(1991年12月)
- 〔6〕金岡正樹『芽室町援農協力員アンケート集計』(未定稿)、1991年
- 〔7〕奥田仁『女子労働と賃金 その1』『北海道労働研究』No.129(1980年3月)
- 〔8〕長南史男『高齢者農場の成立条件』『昭和62年度 地域農業複合体による農産物生産コスト低減可能性調査報告書〔続編〕』北海道開発局農業水産部、1988年3月
- 〔9〕流通システム研究センター『農協における人手不足・高齢化対策のための省力化・自動化に関する調査報告書』流通システム研究センター、1992年6月